

予備校の放課後、がんにがらめに拘束された真面目な私。

電マ・吸引クリバイブ・電動ドリルの執拗責めの、泣きイキで何十回も連続絶頂し、優等生の仮面を壊されました。

プロローグ 予備校で

第一章 彼女を誘う 悠馬視点

第二章 彼の部屋で、背徳の時間

第三章 受験生の歪んだ恋愛遊戯

第四章 罪悪感と快楽の狭間でエスカレートする責め

第五章 永遠の快楽と強すぎる彼の独占欲

エピローグ 置き去りの春

プロローグ 予備校で

週末、私はいつものように、予備校の教室で自習をしていた。

その日も予備校の自習室には、受験の焦げた匂いがした。古い木材の匂いと、何千人ものため息が凝縮し、未来への焦燥感が混ざり合ったような独特の匂い。

「ふうっ……」

午後十時。誰かのため息と共に、館内放送が流れる。

「間もなく、閉館時間となります。利用者の皆様は、速やかにご準備ください」

いつもの無機質なアナウンスが、天井から冷たく降り注ぐ。

その途端に、室内に張り詰めていた緊張の糸が一斉に緩む。

「ふわああああ……」

誰かがあくびをして伸び、カリカリと音を立てていた鉛筆の動きが止まる。カバンを開くファスナーの音、椅子の脚が床を滑る音が合図のように連鎖した。皆、一秒でも早く、この夢を呪いに変える場所から逃れたいと思ってる。

だけど私は、まだページをめくっていた。

「もう……時間か」

世界史の教科書。もう何十回と目に入れているのに、頭の中に定着しない。第一志望の大学に入ったところで、人生が保証されるわけではないことくらい、嫌というほど知っている。でも、ここで止まったら、私自身を否定してしまう。そんな気がして、ページをめくる指が止まらないのだ。

「ねえ……」

私の右斜め後ろ、いつも決まった席に座る彼の影が動いた。

「えっ……？」

「帰り、俺の部屋に寄ってかない？」

「寄ってく？　部屋に？」

「はは……息抜きにいいかなって思ってた。漫画とか？」

彼は、軽く空に溶けてしまいそうな声で言った。疲労で少し窪んだ目の下に、まだあどけなさが残る、高校生のような無邪気な光をたたえて。

「……」

彼の名前は悠真。私と同じ浪人生。同じ大学の、同じ学部を目指している。でも年齢は一個上、彼は二浪しているのだ。

「息抜き……か」

「そう、息抜き」

彼はいつも優しい。休憩中に「疲れたね」と差し出す缶コーヒーの温もりや、難しい問題につまずいたとき、さりげなくヒントをくれるタイミングが絶妙。その優しさは、張り詰めた受験生活の中で、私にとって唯一の安らぎだった。

「いや、嫌なら別に……」

でも、私は知っている。その優しさの奥に、同じだけ張りついている焦りを。去年の失敗を背負い、さらに背水の陣を強いられている、後が無い彼の脆さを。

皆、見て見ぬふりをする。互いの傷に触れない事が、私たちの不文律だから。

「……いいよ」

鉛筆をペンケースにしまう音が、答えだった。

「よかった……」

夜の帳が、街の灯をぼかす。冷え込んだ空気の中、特に言葉もなく歩いた。彼の古いアパートは、予備校から歩いて十分ほどの場所にあった。

ガチャン。



アパートの部屋の、古びたドアの鍵が開く音が、廊下にやけに高く響いた。二階の、日当たりなど期待できないであろう、狭いワンルーム。

「どうぞ」

部屋の中は、予想通り殺風景だった。六畳の空間を、小さな勉強机と椅子、一人分の布団が占拠している。大学のキャンパス風景を印刷したポスターが、受験生らしく願掛けのように貼られていた。それを見ると、切なくなってくる。

「コーヒー飲む？」

「うん」

その勉強机の上には、私と同じ、真紅の装丁の赤本。第一志望の過去問集だ。それは開いたまま、何行かの赤いボールペンの線が引きかけで止まっている。昨日の、彼の勉強の終わりを物語っている。

「はい」

インスタントコーヒーの湯気が香り、不揃いのカップがテーブルに置かれた。

「休憩しよ。少しだけ。漫画とか……」

「そうね」

悠真が、ひどく穏やかな疲れきった声で言った。部屋の隅に積み上げられた、もう読まなくなったらしい漫画の山を指さして。

同じ……私も、毎日、焦りで精神が疲れている。

断れなかった。というよりも、断れないように、彼が私を誘った気がした。彼の優しく静かな眼差しが、私の意志の全てを削ぎ落としてしまうようだった。受験の重圧に、押し潰されそうになっている二人。どうしても言葉にできない、痛みを共有するような何かを求めてしまうのは、自然なことなのかもしれない。

漫画の山の側に腰掛けた私の、手首が不意に掴まれた。

「え…」

指先が、脈打つ私の手首に食い込んだ。予期せぬその行動に、心臓が跳ねる。

「ね……いいでしょ？」

悠真の顔が近づく。いつもより、ずっと真剣な目つきだ。そこに宿るのは、優しさでも、焦りでもなく、何かを今すぐ手に入れたいという、純粹な渴望。

そうよね……漫画じゃなく、そう言う事よね……。

それは、この一年間、合格という目標に向かって渴望し続けてきた私たちが、

共通して持っている感情のような気がしてきた。

「大丈夫。すぐ終わるから」

震える声で、彼は囁いた。その言葉が、何を意味しているのかは分る。

どうしようか……。

もちろん私だって、少しはそう言う事もあるかもしれないと淡く思っていた。私たちは、合格というゴールに辿り着くため、毎日時間を切り売りしている。

情念のこもった彼の眼差しを見て、私自身を見ているような気分になる。

でも私たちは、今、合格とは最も遠い、快樂に時間を溶かそうとしている。

勉強以外に時間を割くことに、罪惡感があつた。

彼の指が、そっと私の襟元に触れる。この行為が、明日の勉強を私自身を、  
どれだけ焦がすとしても、私はもう、抗うのをやめていた。

「待つて……ちよつと……」

そう言うのが、やっとだった。

第一章 彼女を誘う 悠馬視点

「大丈夫。すぐ終わるから」

震える声で、呟いてしまう。終わるといふのは、嘘だ。何一つ終わらない。  
この俺の焦りも、二浪という重圧も、そして、可愛い彼女への渴望も。

言ってしまったが、後悔している……嫌われたかもしれない。

ずっと見てた。彼女を初めて見た時から、自分をコントロールできなかった。  
俺が二度目の受験の失敗して、また予備校に来た時に彼女も入学してきたのだ。  
第一印象から、凄く可愛いと思っていた。しかも、俺と同じ大学を志望してる。

でも彼女にも、強い焦りが見えていた。その時思った。俺と同じなんだと。一步踏み外せば全てを失う辛さを、俺は一年かけて骨の髄まで味わい尽くした。

そんな中で現れた、彼女。俺の妄想は暴走し、次第に彼女にのめり込み始め、どんどん妄想を膨らませてしまっていた。彼女とのセックスを何度も妄想し、凌辱し尽くすという願望だけが膨らんでいった。

俺は見た。開いた教科書の上に、無機質な閉館のアナウンスが響いたときに、彼女が瞳の奥の焦りをかき消そうと、無理やりページをめくる細い指の動きを。そして、衝動的に誘っていた。正直なところ、断られるだろうと思っていた。だが、なんと彼女は、すんなりと部屋までついて来てしまったのである。



机の上に広げられた赤本、開いたページには、昨日、解きかけた数学の問題。少し前に引いた線の途中で、鉛筆の先が止まっている。焦りと憔悴のせいで、文字が頭に入ってこなかった。問題文の羅列が、ただの砂のように見えた。

二回目の失敗が、脳裏に焼き付いている。あと一点。あと一問。その差で、俺は夢を掴めなかった。親の期待と、予備校の教師の憐れみ。そして何より、もう一年、自分自身と向き合わなければならないという罰。

辛かった……。

集中するために親に借りてもらったワンルームは、俺にとって監獄だった。

すべてが受験のために最適化されている。テレビもない。漫画が唯一の息抜き。壁に貼ったキャンパスのポスターだけが、希望という名の拷問を与える。

そこに、彼女を誘ってしまった。俺の衝動が、そうさせてしまったのだ。

彼女は合格という不確実な未来ではなく、ここに存在する確実な現実だった。

「休憩しよ。少しだけ」

そう言って漫画の山を指したが、俺の指先が求めていたのはそうじゃない。

可愛い彼女が、フワリと目の前を移動する。

彼女が無言で、しかし拒絶することなく腰を下ろした瞬間、俺の胸の奥で、張り詰めていた何かを立って切れる。彼女の沈黙は言葉より、ずっと深く、俺の孤独を受け入れてくれるように感じられた。

不意に掴んだ手首は想像以上に細く、血管が脈打つ熱が掌に伝わってくる。その体温だけが、勉強漬けの日々で冷え切った現実を、一瞬にして上書きした。

彼女はいつも完璧を目指して、誰より必死に机に向かっている。その潔癖さ、その純粹さが耐え難かった。完璧を目指すほど、失敗したときの衝撃は大きい。

俺も分っている辛さ。その気持ち、ひとときでも忘れさせられたなら。

彼女が俺と同じように、必死に受験の呪いから逃れようともがいている事実。それが、俺をこんなにも衝動的にさせていた。

「待って……ちよつと……」

自習室の蛍光灯の下で見た、あの美しく澄んだ瞳。彼女の瞳には戸惑いと、諦めが混ざり合った、曖昧な影が揺れていた。それが、気持ちいを加速させる。

俺の胸は、張り裂けんばかりに高まっている。

机の上の赤本が、二人と同じように息を詰めていた。ページは開いたまま。

あと少しで解けるはずだった問題、あと少しで手に入るはずだった未来がある。それを今、全て棚上げにして、彼は彼女の襟元に手をかけてしまった。

彼女の薄いニットの下に触れた指先に、皮膚の熱が伝わる。

「ちょ、ちよっと」

この行為は、合格とは真逆の方向へ、俺たち二人を押し流すだろう。墮落だ。

「大丈夫だよ」

二度目の大丈夫は、彼女に向けたものではなく、臆病な自分自身に向けた、

最後の言い訳だった。俺が、そつと彼女の唇に触れる。ずっと、触れたかった。俺は、彼女と楽しむ妄想を膨らませた結果、いろんな準備をしていた。

本当は、使う予定の無かったもの。自分でも異常だってわかっていたもの。彼女と使う事を想定して、インターネットで買いそろえたものがある。

それを……ずっと、使いたいと思っていたのだった。

## 第二章 彼の部屋で、背徳の時間

「待って……お願い……そこは……」

彼の指が、唇からするりと、私の耳朵をゆっくりとなぞる。

「女の子は、ここ弱いよね？ 知ってた？」

耳元で囁かれると、身体がビクンと反応してしまう。彼は……暴走してる。

「やっ♡……ん♡……」

抵抗しようとしても、もう力が入らない。大胆な彼に、抗う事ができない。

「いいだろ？」

シャツのボタンが、一つ一つ外されていく音が、静かな室内に響くようだ。ブラの上からそっと胸を包み込まれ、思わず鳥肌が立つ。

「綺麗だよ……もつと見せて」

胸元を見つめる彼の目は、いつもの優しさとは違う何かがあった。



「あっ♡……だめ……そこは……あっ♡」

指先が潜り込み、ブラの隙間の乳首に触れた瞬間、快感が背筋を駆け抜ける。

ぴくん♡

身体が震えて、止まらない。

「もう、こんなに乳首を固くして……感じてるんだね」

恥ずかしさで頭が真っ白になる。彼の唇が首筋を這い、舌先で鎖骨を舐める。

「ああ……そこ……だめ♡」

グツとブラをずらされると、ぷっくりとした乳首があらわになっつてしまう。彼の瞳がそれを捉え、喉がごくりと鳴る。

「美味しそう……」

「やだ……♡」

温かい吐息を感じた直後、舌全体でゆっくりと乳首を舐め上げられる。

「ひゃああっ♡！」

びくん♡

舌先で転がされる度に、甘い痺れが全身を支配していく。

「可愛い……もっと声を聞かせて。ずっと聞きたかったんだ」

もう片方の乳首も指で摘ままれ、軽く引っ張られる。

「あん♡」

嬌声が自然と漏れてしまった。

「気持ちいい？」

頷くしかできない。彼の手が太腿を這い、内側の柔らかい部分に到達する。

「やあ  
♡」

デニムのファスナーが下ろされる音が、卑猥に響く。ゆつくり脱がされると、秘部がすでに湿っていることが、自分でも分かってしまった。

「パンティ、すごい濡れてる……欲しかったの？」

「ちがっ♡」

するっ♡

パンティの上から、割れ目をなぞられる。

「ひゃあああ♡」

「もう、素直になってよ」

指先が、中心を強く押した。

「ああああっ  
♡」

「直接触れても良い？」

返事を待たずに、指がパンティの横から中に侵入してきた。

くちゅう。

「とろっとろだね」

「ああ……だめえ」

抗議の声も、快感に変わってしまう。

「ここはどうか？」

クリトリスを探し当てられると、身体が大きく仰け反った。

「女の子は、ここが、好きなんだよね？」

小刻みな指の振動が、敏感な粒を刺激する。

「い  
い  
っ  
♡  
」

悲鳴と共に、快感の高みへゆつくりと向かっていく。

「やっぱ、気持ちいいんだ？」

「う、う、んふっ♡  
」

なぜか、めちやくちや気持ち良かった。



くりゆくりゆくりゆくりゆ。

クリトリスを弾く指が、凄く早くなってくる。体が、ビクビクしてしまう。

「やっ♡ イっちゃうっ♡ イっちゃうっ♡！」

肉豆の刺激に全身が硬直し、腰が浮き上がる。

「んんーっ♡♡♡」